紀伊半島大水害 10 年からのレジリエンスに関するシンポジウムと調査・研究

Research and Symposium about resilience 10 years of flood damage on the Kii Peninsula

宮定章[1]，塚田晃司[1]，平田隆行[1]，南出考[2]

[1]災害科学・レジリエンス共創センター，[2]紀伊半島価値共創基幹

1. プロジェクトの背景

災害科学・レジリエンス共創センター（以下，災害センター）設立，2 期目になる 2021 年は，東日本大震災・紀伊半島大水害 10 年である。

これまでにも和歌山大学では，災害センターでの教育・研究のため，教育としてボランティアバスの運行，研究として災害センターのメンバーが中心となり基盤研究（A）「平成 23 年台風 12 号豪雨災害情報に基づいた実効ある防災・減災対策の構築」等を行ってきた。

また，一般社団法人国立大学協会の協力を得て，「紀伊半島大水害の経験を踏まえ，これからの地域防災を考える（2012 年）」，「紀伊半島和歌山県のこれからの災害をイメージする（2014 年）」をテーマに，防災・日本再生シンポジウムを開催してきた。

紀伊半島大水害 10 年（2021 年）を機に，災害センターでは，改めて，新規事業にて，取り組むべきと考えた。

2. プロジェクトの目的

紀伊半島大水害１０年を迎え，県民の防災意識を高める機会と捉え，一人でも多くの県民の命と県土の生活を守るため，地域社会と連携し，災害に関する課題解決を目指す実装に向けて取り組み，和歌山県の防災力強化を目指すことを目的とする。

3. プロジェクトの活動内容

今一度，自然の怖さ，防災の知恵の大切さ，避難生活での助け合いを振り返り，地域の力を再確認する場をつくることで，当時生まれていない若い世代や，知らない人にも語り継ぐ機会とし，防災意識の向上と地域への愛着を増すために，シンポジウムと調査・研究の２つのプロジェクトを行った。

図 1 紀伊半島大水害復興事業状況’（那智谷付近）

3.1 シンポジウム

2021 年 11 月 27 日（土）13:30～16:40，南紀熊野ジオパークセンターから，オンライン（YouTube）配信を行った。参加者 190 名（社会福祉協議会等の災害ボランティア関係者をはじめ，自治体関係者，企業，一般市民の皆様，大学教職員，大学生等）は，オンラインを通じて視聴した。現在の本学の YouTube チャンネルで，配信しており，常時視聴できる[1]。

シンポジウムのタイトルは，「これからの災害ボラ

ンティア・地域の支え合い～紀伊半島大水害１０年とコロナ禍の経験から～」で，開催趣旨は，下記である。

『2021 年は，紀伊半島大水害から 10 年の節目の年です。被災された地域には，地域の支え合いとボランティアで乗り越えてきた活動の実績があり，10 年が経過した現在でも，「子供たちに同じつらい目にあわせたくない」と取り組んでいる挑戦があります。また昨今，コロナ禍の影響で，これまでの行動様式をそのまま活かすことができない時代に突入しました。地域自治と災害ボランティアの関係も変わらざるを得ず，災害が発生してもすぐにボランティアが駆け付けられません。コロナ禍の中で発生した令和 2 年 7 月豪雨での災害ボランティア活動からは，どのような課題と教訓が見えたでしょうか。

本シンポジウムではこれら二つのことから，災害から身を守る知識を改めて学ぶとともに，これからの災害に，地域社会とボランティアがどう備えていくべきかを考えます。（開催概要より）』

和歌山大学学長伊東千尋より開会の挨拶の後，筆者からの趣旨説明をし，開始した。

シンポジウムは，2 部制で，第 1 部は基調講演，第 2 部はパネルディスカッションを行った。

第 1 部基調講演は「紀伊半島大水害を振り返り，これからの災害に備える」をテーマに行った。

図 2　基調講演 1　後誠介氏

講演 1「紀伊半島大水害から命を守る教訓」と題して，和歌山大学災害科学・レジリエンス共創センター客員教授後誠介氏が，紀伊半島大水害に関して，台風の動きと位置から雨量等の状況，そして，その雨量による破局低災害の実態を地質の観点からグラフや写真を用いてわかりやすくご教示いただいた。最後に，見えてきた課題として，川の氾濫による河川災害には，川の水位変化を見ながら，避難勧告・避難指示がでるが，同じように土砂災害の危険度の予測も必要ではないかと提起され，紀伊半島大水害のデータを事例に，その判定基準と判定の仕組みについて説明してくださった。

図 3　基調講演 2　室﨑益輝氏

講演 2「災害時に期待される力～災害ボランティア・地域の支え合い～」と題して，兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科教授･特定非営利活動法人日本防災士会理事長の室﨑益輝氏が，自然の凶暴化と社会の脆弱化，そして，災害の激甚化，多様化，複合化，長期化についての説明後，自助・共助・公助についての最近の状況を鑑みた，これからの災害ボランティアのあり方を示し，そして最後に，災害ボランティアとコミュニティの関連性について，必要な視点を述べた。

図 4　パネルディスカッション会場の様子

第 2 部のパネルディスカッションでは，5 名のパネリストから活動報告を頂き，その後，コメンテーターからのコメントを交え進行をした。

図 5　南出考氏

最初の報告は，「紀伊半島大水害における災害ボランティア」と題して，和歌山県社会福祉協議会和歌山県災害ボランティアセンター所長の南出考氏が，紀伊半島大水害時，孤立集落ができて，そこに一人でもボランティアを届けたく思っていたが，実施するには，課題が多くあった。そこで，より被災地の近くに災害ボランティアセンターを設置し，多くの支援者と協力して「１万人プロジェクト」として，ボランティアを集い，見事２ヶ月後には，『今後は、地元の私達でします。』と，災害ボランティアセンターを解散できた。南出氏はこれまでの経験から，災害が起こったときに「はじめまして」をなくそうと，日頃からの地域の助け合いが災害ボランティアに大切なことを伝えた。

図 6　下阪殖保氏、木村康史氏

次に，「大災害の教訓を活かした取組み～チーム熊野川住民災害ボランティアセンターの挑戦～」と題して，新宮市熊野川町のチームくまのがわ下阪殖保氏，木村康史氏が，災害直後の避難の怖さの体験談，その後の避難生活の助け合いの様子を報告した。それらの教訓を生かして，現在では，チーム熊野川住民災害ボランティアセンターを設立（2018 年）し，地域での訓練等の取り組みを紹介した。この 10 年目には，黄色いハンカチにメッセージをつけて講演一面に展示する復興イベントを行い，災害ボランティアへの感謝，そして，これまでの自分たちのメンバー頑張りをたたえ，今後も，地域活動を継続していくことを共有されたことが報告された。

図 7　山北翔大氏

4 人目のパネリストからは，コロナ禍で起こった最初の災害である令和２年７月豪雨で被害にあった熊本県の球磨川流域の人吉市を中心に災害ボランティアを行っている熊本学園大学社会福祉学部 3 回生の山北翔大氏より，「コロナ禍の学生災害ボランティア活動を通じて学んだこと」と題して，コロナ禍での災害ボランティア活動における工夫や苦悩を報告していただいた。

図 8　高林秀明氏（オンライン出演）

続いて，同じく熊本学園大学の社会福祉学科教授で，災害ボランティアの学生とともに活動をする高林秀明氏より，コロナ禍での災害ボランティアの人数等を示し，コロナ禍での災害では，自治体の応援職員や業者と同様に,災害ボランティアについても，どのように実施できるかを考える必要があると，訴えられた。また，被災地には，再建を諦めそうになっている被災者がいることの実態を紹介していただき，若い学生の災害ボランティアは，励ましの役割もあると報告されるとともに，学生自身も災害ボランティアによって感謝される等で，自己肯定感をあげて就職活動に再チャレンジする等の報告があった。

3.2 調査・研究

10 年前の紀伊半島大水害では，567 戸が床上・床下浸水するという大きな被害を受けたにもかかわらず，水害による直接の死者は０人（関連死 3 人）である古座川町を調査対象とした。

本学の紀州経済史文化史研究所の「オーラリティによる歴史・文化発掘とオーラルヒストリー・アーカイブ構築」の一部である「紀伊半島大水害をめぐる災害復興のプロセス（代表 : 山神運営委員)」を実施しており，合同で調査・研究を行っている。

9/26～9/28，紀伊半島大水害の被害の大きかった那智勝浦町，新宮市，古座川町の現状を把握した。

図 9　古座川町役場挨拶

9/27 に学長と紀伊半島価値共創基幹，紀州研と古座川町役場を訪問し，調査・研究の開始に際し，説明と協力依頼をし，了承を得た。

その後，10/24～10/27，11/8～11/9 に，被害の古座川町の全体の踏査を行った。被害のあった地区に加え，道路等の被害により，影響を受けたである山間の地域にも踏査を行った。

図 10　オーラリティ調査の様子

3/2～3/4 は，古座川町役場の協力の元，地域住民から災害時の避難の体験談と，災害への備えについての語りを動画収録した。

4. プロジェクトの成果

シンポジウムを，いつでも視聴できるように動画配信をしている。

和歌山大学 Kii-Plus ジャーナルに，1950 年以降の古座川町における人口の減少過程－年齢構成の変化に着目した分析－（筆頭著者山神達也）として報告した。

静岡大学と当大学の行っている半島研究フォーラムにて,「紀伊半島における災害レジリエンスの取り組み」として報告した。

日本災害復興学会のニュースレターに，「特集紀伊半島大水害 10 年　住民災害ボランティアセンターの取り組みから学ぶ」と題して，紀伊半島のレジリエンスの取り組みを紹介した。

引き続き，地元大学として，紀伊半島大水害１０年を期に,災害科学･レジリエンス共創センターが,知見を学内で共有し，今後の紀伊半島の地域貢献に関わるための資源とする。

注

[1] これからの災害ボランティア・地域の支え合い | 和歌山大学_災害科学・リジリエンス共創センターhttps://youtu.be/GEIOiAic_-4